総合学習「クリスマス会」の実践

古田陽子

1. 個が生きる総合学習の構成と評価

本学級では、教科・領域に分けることができない指導内容の学習を「総合学習」として構成している。(総合学習のねらいと内容については初等教育53号参照)

(1) 学習活動の構成

本学級には低学年組、中学年組、高学年組の3クラスがあり、総合学習においてはその3クラス合同で学習を行うことが多い。1年生から6年生の児童までという大きな集団の学習では、学年による経験の差を生かした学習が構成できたり、児童同志のかかわりもひろがるといった利点がある。しかし、個人差の大きい集団となるので、個々の児童のねらいが明確にされ、そのねらいに迫っていくための学習活動を指導者がしっかり捉えていないと、個が生きる学習とはなりにくい。

学習活動を構成する際には,個別理解(障害の実態,発達の段階,興味・関心,生活経験,対人 関係等)に基づき個に応じた活動を用意するとともに,各クラスの実態(集団活動,日頃の学習内 容等)も考慮する必要がある。個々の児童が生き生きと学習に取り組み,「できた」「やった」とい う充実感,満足感を味わうように,個の実態やクラスの実態に応じて,学習活動の量や内容を変え ていくことも考える。

(2) 評価

総合学習が毎年の単なる経験の繰り返しとならないように、単元における評価の観点を明らかにする。また、単元の指導後の評価を個々の児童の生活や学習の課題として捉え、日常の生活や学習において指導を続けていく。その結果が、次年度の同単元の学習で現れてくると考える。総合学習では6年間を通して児童の成長をみるというように、長期的な視野にたって評価していくことも必要であろう。

2. 実践事例「クリスマス会」

(1) 単元について

毎年12月が近づくと、児童から「今年の劇何するん?」、「サンタクロースくるかね」という声が聞こえてくる。恒例行事として12月初旬に行っているクリスマス会を、児童はとても楽しみにしている。本学級のクリスマス会は季節行事であるとともに、児童の学習を発表する場としてもとらえている。クリスマス会当日は、保護者や教育実習生、他学級の児童の前で、劇や音楽の発表を行う。

本単元の学習活動には、発表に向けての練習や、クリスマス会を盛り上げるための飾りや小道具作り、高学年児童による司会やゲームの進行の準備等を考えている。それらの学習を通して、友だちと一つのことを作りあげる喜びや、表現する楽しさを味わせ、児童の生活をより豊かなものにしていきたい。

(2) 児童の実態

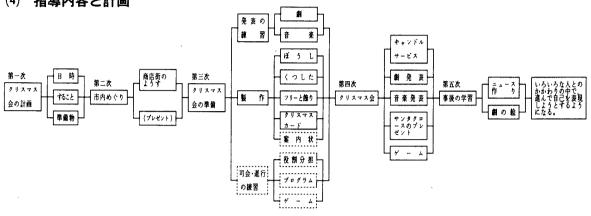
本単元においては、児童の実態を表現に関するもの(意欲、技能)、集団活動に関するもの(参加、協力)という二つの観点で捉えていく。

児童の実態としては、過去のクリスマス会の経験を生かして、見通しを持って活動に取り組める 児童から、クリスマス会は今年初めてという1年生の児童まで、様々である。

(3) 指導目標

- ① クリスマス会の学習活動を通して、表現意欲を高め、様々な人間関係の中で表現しようとする態度を養う。
- ② クリスマス会をみんなで作りあげることにより、集団活動に進んで参加する態度や、協力する態度を養う。

(4) 指導内容と計画



([は高学年組のみが学習する内容)

(5) 学習活動の構成

本単元における学習活動をまとめたものが〈表1〉である。指導内容を考えて,個々の児童のねらいが達成し易いように,各組ごとで学習する活動も多く組み入れている。

それぞれの学習活動では、これまでの経験や学習が生かされるように考えている。例えばぼうしづくりという指導内容において、低・中学年組ではボール紙でぼうしを製作するが、高学年組は生活科で学習している縫いものの経験を生かして布で作製する。また、低学年組のクリスマスカードには図工で学習したスタンプの技法を取り入れる等、児童の活動が充実したものとなるようにした。

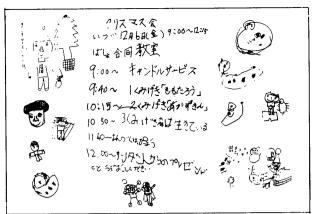
〈表 1〉単元「クリスマス会」における学習活動

指導の内容	学 習 活 動	時数	指導	形態
クリスマス会の 計 画	○昨年のクリスマス会のVTRを見て、思い出したことなどを発表する。 ○今年のクリスマス会について、することや準備するもの等を話し合う。	1	合	同
劇 発 表	○劇の発表に向けて、物語の学習や劇化の学習を行う。 本年度…低学年組は「ももたろう」、中学年組は「赤ずきん」、高学年組は「森は生きている」を発表	約15	各	組
音 楽 発 表	○歌唱や、踊り、器楽演奏の発表の練習をする。 本年度…歌と踊りは「うさぎ野原のクリスマス」 楽器演奏は鍵盤ハーモニカの演奏。低学年組は「走れ救急車」, 中学年組は「キラキラ星」,高学年組は「ドレミの歌」を演奏	2 4	各合	組同
市内めぐり (校外学習)	○商店街やデパートのクリスマスの飾りつけを見る。 ○自分の物とペア※の友達へのプレゼントを買う。	4	合	同
ぼうし作り くつした作り クリスマスカード作り	○音楽発表の時にかぶる帽子を作る。○サンタクロースのプレゼントを入れてもらうくつ下を作る。○保護者と交換するカードを作る。	4	各	組
ツリー作り	○クリスマスツリーとその飾りをつくる。	2	合	同
案内状作り	○クリスマス会の案内状を作って、簡易多色印刷機で印刷し、校内の先生方や保護者、教育実習生に配布する。	2	高学年組	
司会,進行	○司会やゲームの進行係の役割分担を話し合い,練習する。 ○プログラムを書いたり,ゲームの準備をする。	3	高学年組	
クリスマス会を ふりかえって	○クリスマス会のVTRや写真をもとに、したことをふりかえってニュース作りをする。 ○劇の絵を描く。(想画大会関連)	3	各	組

※本学級では年度頭初に児童同志のペアを決め、いろいろな学習において活用している。

クリスマス会の案内状は、伝える相手や伝え たい事項がこれまでの経験からよくわかってい る高学年組児童が、毎年製作している。また、 高学年児童の特性であるリーダー性も発揮でき るように、司会や、発表の合い間のゲームの進 行も、高学年児童に行わせた。

学習活動においては、児童の実態に合わせて活動の量を変えていくことも考えている。例えば、くつした作りのくつしたの飾りについて、あらかじめ用意された飾りを貼るだけの児童、



〈図1〉児童が作った案内状

飾りを切って貼る児童、飾りを描いてから切って貼る児童というように、どの児童もくつしたづくりに進んで取り組み、「できた」という満足感が得られるように配慮した。

(6) クリスマス会当日

当日は本学級の多目的教室に舞台を設置した。 (会場設営については本校研究紀要昭和61年度 参照)保護者や、教育実習生、本校の2年生と 複式低学年組の児童、及び本校教官を招待して 行われた。劇や音楽の発表の合間には、ゲーム も行われ、観客と本学級の児童が一体となって 楽しめる会であった。会の終わりには、副校長 が扮するサンタクロースが登場し、児童はひとり



ひとり,プレゼントが入ったくつしたをもらった。 **〈写真 1〉サンタクロースからのプレゼント**

午後からは児童が用意したお菓子(本年度は寒天ゼリーとラスク)と紅茶で,保護者,教育実習生との茶話会が開かれる。児童同志のプレゼント交換,保護者と児童とのクリスマスカート交換を行った。

(7) 評価

ひとつひとつの学習活動では、それぞれの観点を持って、評価を行う。単元全体の評価は、児童の実態で述べた、表現に関するもの(意欲、技能)、集団に関するもの(参加、協力)という二つの観点で行う。

児童にとっては、クリスマス会当日が単元を通して学習してきたことへの評価の場となる。観客 席からの大きな拍手、「上手にできたね」等の保護者からの賞賛のことばに、どの児童も満足そう な表情をしていた。

3. 劇の発表-低学年組の実践-

劇の発表は、単元の中で最も多くの時間をかけて取り組む学習活動であり、児童がとても楽しみにしている活動でもある。劇の発表について低学年組における実践を報告する。

(1) 劇づくりでねらうもの

劇をつくり、発表する過程において、児童は楽しい雰囲気の中で、ことばや動作で表現することを学んでいく。表現することが楽しいという思いが、表現意欲の育成へとつながっていくと考える。 劇はコミュニケーションで成り立つものである。演出者である指導者と児童とのコミュニケーション、演じる児童相互のコミュニケーション、演じる児童と観客とのコミュニケーション、それらのコミュニケーションが劇づくりによって促進される。

また、みんなで一つの劇をつくりあげることで、集団の中で自分の役割や仕事を意識して行動する力を養うことができると考えている。

(2) 児童の実態と課題

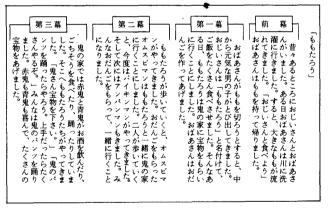
劇づくりに入る前の児童の実態を,話の理解,表現(ことば,身体),特性(興味・関心,友だちとのかかわり)で捉え,劇づくりにおける課題を設定した。

〈表2〉劇づくりにおける児童の実態と課題

項目	実			態		課 題
児童	理 解	ことばによる表現	身体表現	興味・関心	友達とのかかわり	珠 題
1	簡単な話の登場人物を一部 あげることができる。	発音不明瞭ではあるが、二 語文で話す。	身体模倣ができる。 踊るのが好き。	ピスカル, 刀など男の子っ ぼいものが好き。変身ごっ こも好む。	児②, ③に 関 心を示す。 児⑤と気が合って一緒に遊べる。	自分の役がわかり、他の友 だちとのかかわりの中で演 技することができる。
2	絵本や紙 しばいを見て知っているものの名前を言うことができる。	要求語が中心。単語で表現 することが多い。	モデルを示すと、大きな動きが模倣できる。繰り返し 行った指あそびは覚えている。	自転車に乗るのが好き。 調理活動に関心を示す。	友だちをモデルにして行動 することがある。かかわり は少ないが児⑥に関心を持っている。	自分の役がわかり、最後ま で演技することができる。
3	絵本や紙 しばいを見て知っているものの名前を言うことができる。	要求語が中心。二語文で表 現することができる。	指あそびや手あそびが好き。 大まかな動きの模倣ができ る。	クレパスでの色ぬりが好き。 調理活動にも関心を持って いる。	友だちの耳をさわるという 一方的なかかわりが多い。 かかわりの中心は大人である。	自分の役がわかり、最後ま で演技することができる。
4	物語の登場人物をあげることができる。あら筋もとらえることができる。	自分がしたこと等を文で表 現することができる。語い も豊富である。		家では毎日ファミコンで遊んでいる。バス通学により, バスに関する話題が増えている。		友だちとかかわりながら自 分の演技を行うことができ る。
6	物語の登場人物をあげることができる。場面の情景を とらえることができる。	発音は不明瞭であるが、経験を二語文、三語文で話す。 感情の表現もできる。		活発な遊びを好む。	自分からかかわろうとする。 特に児③の世話をしたが る。 友だちのことを考えて 動けるようになってきつつ ある。	友だちとかかわりながら、 自分の演技を行うことができる。
6	物語の登場人物をあげることができる。	経験したことや思っている ことを二語文, 三語文で話 す。		絵を描くことを好む。 お人形や髪いじり等が好き。	やさしくしてくれる友だち と遊びたがる。大きな声を 出す友だちはこわがる。友 だちとのかかわりが増えて きている。	場面をとらえて友だちとの かかわりの中で演技するこ とができる。

(3) 劇づくりの実際

① 題材「ももたろう」の決定と脚本づくり



児童全員がそれぞれの段階で理解しやすく, かつ興味・関心の持てるものをという観点で題 材を選択した。「ももたろう」はストーリーの 展開が単純でつかみやすく,登場人物の行動も 具体的でわかりやすいので,本学級の児童の実 態に合っていると考えた。

「ももたろう」の話は今までにも何度か読み 聞かせたことがあり、児童が大好きなお話の一 つである。しかも、一学期からの調理学習で何

度も団子作りを経験しているので、団子をもらって一緒に行くというストーリーは児童にとって、 共感できるものである。しかし、劇化においては、いぬ、さる、きじという登場人物は、児童にとってあまり魅力がない役である。児童が楽しみながら劇づくりに取り組めるように、児童が大好きなアンパンマン、オムスビマン、バイキンマンを登場させることにした。

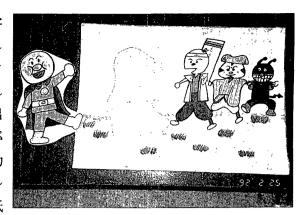
役割は上記の実態と課題を考え、右のように決めた。話すことが得意ではあるが、日頃他児とのかかわりが少ない児④は、他児とのかかわりが持てるようになって欲しいというねらいから、ももたろうの役に決めた。児⑤は、他児のことも考えて行動することができるようになりつつあるので、児③と一緒に鬼の役をすることで、児③の演技をひき出すようにした。

台詞や動作は各児の実態に合わせて考え、好きな物や好きな事を取り入れることで意欲的に劇づくりに取り組めるよう配慮した。

児①	オムスビマン
児②	アンパンマン
児③	赤鬼
児④	ももたろう
児⑤	おじいさん 青 鬼
児⑥	おばあさん バイキンマン

② 物語の学習

劇化の前に物語の登場人物や筋を理解していく学 習を物語の学習と称している。今回は、自作の紙し ばいを使用して学習を進めていった。型はめが好き な児②と児③が学習に参加し易いように、この紙し ばいは登場人物が型はめになっている。次に誰が出 てくるかを、型にはめることによって、児童自身が 評価できるようにした。登場人物が取りはずせて動 かせるので、児童には好評であったが、ダンボール 紙で作成したために、一枚一枚の厚みが増して、紙 しばいとしては扱いにくいという難点もみられた。



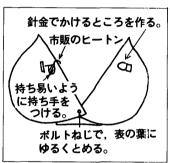
〈写真2〉紙しばい

③ 劇化の学習

自分の役に合わせて演技したり、台詞を言ったりする学習を「劇化の学習」と称している。劇化

の学習では、児童が楽しく演技できるためにはどのような手だてを講じ れば良いかを常に考えている。そのためには、児童の実態に合わせた台 詞や動作を用意するのはいらまでもないが、劇を盛りあげるための小道 具も大切な役割を果していく。ももたろうの話のおもしろさの一つとし て、ももの中からももたろうが出てくるというものがある。今回は「も もしを右図のように工夫してみた。タイミングよくももが割れてとび出 せると、演じている児童も観客をおどろかす楽しさがある。

児童は好きな小道具を持つと、演技に意欲的になることがよくある。 児①には、好きな刀と旗を持たせた。児②の演技には、演技が持続でき るように児②が得意としている自転車乗りを取り入れた。また、「おだん ごちょうだい」という台詞と演技をひき出すために、本物の団子を使用 した。



〈図5〉「もも」を裏側から 見たところ

脚本ができあがった時点で、台詞や効果音楽を入れた演技用テープを作成し、各児童に持たせた。 繰り返しテープを聞くことで,台詞や演技のタイミングをつかんでいくことができた。

4 評価

劇づくりの課題に対する評価として,当日 〈**表3〉当日の演技の様子** の演技の様子を記述したものが〈表3〉であ る。

表現意欲,集団活動への参加態度は,引き 続き、日々の生活や学習の中で評価していく。 自分たちで役割を決めて「ももたろうごっこ」 をする児童の姿に、表現する喜びや、友だち と一緒に活動する楽しさを味わっているのを みることができた。

⑤ 事後の学習

)	児①	オムスビマンの踊りの動作が練習時よりも増え、自分で工夫して踊っていた。 演技の内容や流れをよくつかんで演技することができた。
	児②	自転車に乗って登場すると、みんなから歓声があがった。「おだんごちょうだい」とはっきりと言い、手をさし出す動作もできた。
	児③	児⑤と台詞のやりとりができた。鬼の踊りは踊っていたが、練習時のような笑顔が 度もみられなかった。スポットライトがまぶしかったようだ。
	児④	相手の動作に合わせながら、タイミングを見計らって台詞を言ったり、動作をしたり することができた。
•	児⑤	おじいさんと鬼の役をアドリブの演技も加えながら生き生きと演技することができた。
	児⑥	おばあさんとバイキンマンの二役を見事にこなした。 台詞もはっきり言え、 踊りも楽 しそうに踊っていた。

クリスマス会後に、劇のビデオを見せると、ビデオに合わせて台詞を言ったり、動作をしたりし ていた。何度でも見たがる児童の様子から、劇づくりが楽しかったことが伺われる。

写真を見ながらのニュースづくりでも,自分の役のことを中心に,演技したことがいろいろでて きた。

4. 考察

(1) 学習活動の構成について

クリスマス会の計画では、昨年のクリスマス会のことを思い出しながら、準備する物やクリスマス会までにする事を発表できる児童が多かった。ほとんどの児童が昨年発表した劇の題名に限らず、役割や台詞までもよく覚えていた。そして「今年はどんな劇をするのだろう」と期待していた。毎年同じ学習活動を構成することで、児童に学習の見通しを持たせることができたといえよう。

児童によって、あるいはクラスによって学習活動の量や内容を変えたことで、より児童の実態に合った学習活動となり、日頃の生活や学習での経験を生かせるものとなった。例えば高学年組の児童は、宿泊学習でのレクリエーション係としての経験や、いろいろ行事の司会の経験を生かして、見事にクリスマス会の司会とゲームの進行をこなした。個人差の大きい集団であればあるほど、個が生きる総合学習となるためには、児童の生活や学習の経験を踏まえて、多岐にわたる学習活動を用意する必要がある。

(2) 表現意欲について

単元「クリスマ会」における自己表現には、いろいろな表現方法が含まれているが、ここでは劇の学習に関する表現意欲について、児童の様子から考察する。

クリスマス会の劇は、クリスマス会が終わってもいつまでも児童の心の中に残っている。児童の中には、家に持って帰った演技用テープを次の劇に取りかかるまで、毎日のように聞いている児童もいる。本年度の低学年組でも、年が変わっても給食時に「ももたろう」のテープを聞いている。そしていつのまにか劇あそびが始まる。生活の中で遊びとして劇が発展していく様子から、劇の学習は表現意欲を高めるのに適しているといえよう。ただし、表現意欲を高めることができる劇は、児童にとって表現した充実感や満足感が味わえるものであり、児童が演じるのが楽しいと思うような劇である。クリスマス会で劇をしたことが楽しかったという思いが、3学期の学芸会の劇、来年のクリスマス会の劇をつくる意欲へとつながっている。

児童に表現したことの充実感や満足感を味わわせるためには、表現を披露し、認めてもらう場を 指導者が設定することも重要である。観客の拍手や声援が、練習時にはみられなかった演技を引き 出すことが多々ある。

(3) 人とのかかわりについて

市内めぐりでのお店の人とのかかわり、プレゼント交換でのペアの人とのかかわり、演じる人と観る人とのかかわり等、単元「クリスマス会」では、様々な形での人とのかかわりを考えている。

特に劇の学習では、児④のように友だちとのかかわりが苦手な児童にも、意図的にかかわりの場を設定できる。児④は、「ももたろう」の劇で、友だちの演技に合わせた演技をすることができた。 3学期の学芸会でも、友だちとかかわらなくてはならない役にしたところ、友だちの演技を気にしながら、友だちをリードして演技することができた。学級内でも、友だちへの発言が積極的になり、自分からかかわりを持とうとすることも増えてきた。

また、劇はいろいろな役の人が集まって成り立つものであるから、役割意識もできてくる。演技用テープを聞きながら、「次は○○ちゃんの(言う)番よ」とか、「これ、みんなで踊るんよ」と、会話も弾み、仲間意識も育ってきている。

(4) 単元「クリスマ会」の評価について

本年度の単元の学習において主体的な活動ができたかどうかは、指導中や指導後の評価だけでなく、来年度の「クリスマス会」で、どれだけ見通しを持って活動できるかにも現れる。総合学習の評価は前述したように、長期的な視野にたって行う必要がある。